

日語語調系統性學習之規則與容許範圍：平板型代用法的適用條件與其極限之實證性闡明

陳冠霖

東吳大學日本語文學系副教授

摘要

本研究將日語詞彙語調二分為「可預測」與「難預測」兩類。針對前者，本研究依據語種、拍數與結構，對其語調規則進行整理；針對後者，則考量品詞、拍數、頻率及辭典所載之平板型語調的容許率，藉此確立促進日語語調系統性學習的規則與容許範圍。本研究尤其透過實證，確立了平板型代用法的適用條件。為避免對語種的依賴，本研究採用初級學習者易於判斷的「拍數 × 特殊拍」此一客觀指標，將其容許度予以公式化。根據計量分析結果，三拍與四拍的詞彙原則上可容許此種代用法，然而二拍與五拍的詞彙時則須審慎。統合上述結果，本研究旨在提出一套得以優化學習者記憶負擔與教學資源的日語語調系統性學習模型。總結而言，本研究銜接了近年語調研究領域「由規範性轉向變動性」的變化，從而提示了一套能與日語教育實踐直接結合的理論性與實證性框架。

關鍵詞：日語語調、平板型代用法、規則、容許、系統性學習

受理日期：2025 年 08 月 28 日

通過日期：2025 年 11 月 07 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202512_(45).0006

Rules and Permissibility for the Systematic Learning of Japanese Pitch Accent: An Empirical Elucidation of the Application Conditions and Limitations of the Unaccented Substitution Method

Chen, Kuan-Lin

Associate Professor, Soochow University, Taiwan

Abstract

This study classifies Japanese lexical pitch accent into “predictable” and “unpredictable” categories. For the former, it systematizes accentual rules based on word origin, mora count, and structure. For the latter, it defines rules and permissibility for systematic learning by considering part of speech, mora count, frequency, and dictionary-based rates of the Unaccented pattern. Empirically, the study establishes the application conditions of the Unaccented substitution method. To minimize dependence on word origin, it quantifies permissibility using “mora count × special mora,” an objective indicator suitable for beginners. Quantitative analysis shows this substitution is generally valid for three- and four-mora words, while two- and five-mora words require caution. Integrating these findings, the study proposes a systematic learning model optimizing memory load and teaching efficiency, aligning with the field’s recent shift “from prescriptivism to variability” and offering a framework applicable to Japanese language education.

Keywords: Japanese Accent, Unaccented Substitution Method, Rule, Permissibility, Systematic Learning

日本語アクセントの体系的学習に寄与する規則と許容 —平板型代用法の適用条件と限界の実証的明確化—

陳冠霖

東呉大学日本語文学科准教授

要旨

本研究は日本語語彙アクセントを「予測可能」と「予測困難」に二分し、前者には語種・拍数・構造にもとづく規則予測を再編・精緻化、後者には品詞・拍数・頻度と辞書記述の平板型の許容比率を踏まえ、日本語アクセントの体系的学習に寄与する規則と許容を定めるものである。特に、平板型代用法の条件付き適用基準を実証し、語種依存を避け、初級者が判断しやすい「拍数×特殊拍」という客観指標で許容度を定式化した。計量分析にもとづき、3・4拍語では原則許容、2・5拍語では特定の特殊拍で慎重を要することを示す。これらを統合し、学習者の記憶負担と授業資源を最適化する日本語アクセントの体系的学習モデルを提示する。本研究は、近年のアクセント研究における「規範性から変動性へ」というパラダイムシフトを日本語教育の実践に直結する理論的・実証的枠組みを提示するものである。

キーワード：日本語アクセント、平板型代用法、規則、許容、体系的学習

日本語アクセントの体系的学習に寄与する規則と許容 —平板型代用法の適用条件と限界の実証的明確化—

陳冠霖

東呉大学日本語文学科准教授

1. はじめに

1.1 アクセントの重要性と学習上の課題

日本語におけるアクセントは、音声体系の中核をなす要素であり、発話の自然さや理解度に影響を与える主要因である。佐藤（1995）は、日本語母語話者が音声の自然さを評価する際、個々の音素の正確さよりも韻律的特徴が大きな役割を果たすことを実証している。アクセントの誤りは、非母語話者の発話に対する不自然さの評価につながるだけでなく、場合によっては意味の誤解を引き起こす。典型的な例が「雨」と「飴」、「橋」と「箸」と「端」の最小対立であり、ここではアクセントのみが意味を弁別する機能を果たす。したがって、アクセントは付随的な要素ではなく、コミュニケーションの成立に直結する基盤的要素とみなされる。

しかしながら、日本語学習者にとってアクセント習得は極めて困難である。その最大の理由は、語彙ごとに異なるアクセント型を暗記しなければならない点にある。高橋（2013）は、日本語のアクセントは動詞や形容詞など一部に規則性が存在するものの、多くの名詞においては予測が難しく、個別記憶が必須であることを指摘している。例えば、3拍語を例にとると、[頭高型][中高型][尾高型][平板型]¹という4種類のパターンが存在し、学習者は語ごとに正確な

¹ 本稿で使用する記号について説明する。複数のアクセント型が現れる場合、読みやすさを考慮しアクセント型は[]で囲む。『NHK』の表記にもとづいてアクセント核は「\」、平板型の語に対しては語末に「-」を表す。その他にも数字でアクセント型を表す場合もあり、①は平板型を指し、丸数字はそれぞれアク

アクセント型を識別して覚える必要がある。語彙量が数千語規模に達する中級以上の段階では、こうした暗記の負担は指数関数的に増大する。さらに、発話の流暢さやイントネーションと複雑に絡み合うため、単純に記憶するだけでは十分でなく、実際の運用場面で安定的に再現することが求められる。この点が、アクセント習得を単なる「丸暗記」に還元できない難しさとなっている。

教育現場の実態も、この困難さを助長している。戸田（2011）は、日本語教育においてアクセント指導が体系的におこなわれていない現状を報告しており、主に三つの課題を挙げている。第一に、カリキュラム上の制約がある。多くの教育機関では、限られた授業時間を文法・語彙・読解に重点配分せざるを得ず、発音指導は「補助的」あるいは「時間があればおこなう程度」に位置づけられている。第二に、教材不足が深刻である。アクセントを効果的に教えるための体系的な教材や音声資料が限られている。また、市販の教科書の多くはアクセント情報が付随的に扱われるにとどまり、中にはアクセント記号が付いていないものが非常に多いという現実もある。第三に、教師側の制約である。教師自身のアクセント知識や指導技術の限界も大きな障壁となっている。教師の中には、自身がアクセントを十分に理解していなかったり、効果的な指導法を身につけていなかったりする場合がある。特に非母語話者教師の場合は、自らのアクセントが課題となるケースも少なくない。鮎澤（2003）が指摘するように、発音指導全般が「時間があればおこなう」程度の扱いにとどまっており、特に複雑なアクセント指導については後回しにされやすい。

その結果、多くの学習者はアクセントに関して断片的あるいは不安定な知識しか得られず、体系的な習得に至らないまま学習を進めている。すなわち、日本語教育は「アクセントの重要性」と「教育

セント核がその拍目に位置する型を示す。

現場での扱いの軽視」というギャップを抱えている。学習者は、意味理解や自然な会話運用にとって不可欠な要素を十分に学ぶことができず、その結果として、母語話者にとって違和感のある発話や、場合によっては誤解を招く発話をおこなう危険を内包しているのである。

1.2 平板型代用法の出現とその理論的背景

日本語アクセント教育の現場では、学習者が語のアクセント型を即時に想起できない場合に「平板型で代用してよい」とする教育法が一定程度みられる（以下、平板型代用法）。これは全面的な代用ではなく、学習初期における一時的・補助的な方略として位置づけられる。この平板型代用法が用いられる背景には、「教育的簡略化」「無標」「アクセント分布」「アクセントの変動性」という四つの要因が存在する。

一つ目は、教育的簡略化としての妥当性である。第二言語習得では、学習者が既存の知識と処理能力の範囲で中間言語を段階的に精緻化していく。Selinker (1972) では、この過程での簡略化は、エラー回避や処理負荷の低減を通じて、可理解性を先に確保し、その後に精度を高める、いわゆる「粗」から「精」への学習設計を可能にすると述べている。授業の設計上も、規則が予測できない語のたびに確認や暗記を求めるより、まずは平板型を仮の出力基準として与える方が、発話の停滞や言い淀みを減らし、発話量・自信・モチベーションを維持できるとしている。さらに、複雑なアクセントの処理は作業記憶の負荷が大きく、不要な分岐を一時的に閉じる。平板型代用法の出発点は認知的に合理的である。平板型代用法は、学習初期における「生産の足場がけ」として教育的合理性を持つ。

二つ目は、音韻論的に見て平板型は無標という考えである。窪菌 (2006) によると、東京式アクセントでは平板型は語の内部にアクセント核を持たない型であり、[-accent] という素性で表せる無標

の状態として捉えられる。さらに、派生・複合・語形成の諸現象において、アクセントの脱落が体系的に起こること、また語彙や拍数に応じて、有核より無核が選ばれやすい環境が存在することを指摘している。すなわち、平板型は日本語の語彙アクセント体系にデフォルトとして許容される自然な出力の一形態であることが言える。

三つ目は、アクセント分布において平板型の比率の高さである。最上他（1999）は『NHK 日本語発音アクセント辞典 1998』（以下『NHK98』）掲載の 67,779 語を語種別の 1 から 6 拍に区分して集計し、無核（平板式）と有核（起伏式）の比率を示した。主な結果（図 1）として、漢語では 3 拍と 4 拍では平板式がおおむね半数以上で、和語では、拍数によって変動するが、平板式の比率は 3 割から 6 割の範囲で総じて相対的に高い。このように、アクセント分布から見ても、平板型は統計的にその存在を顕にしている。

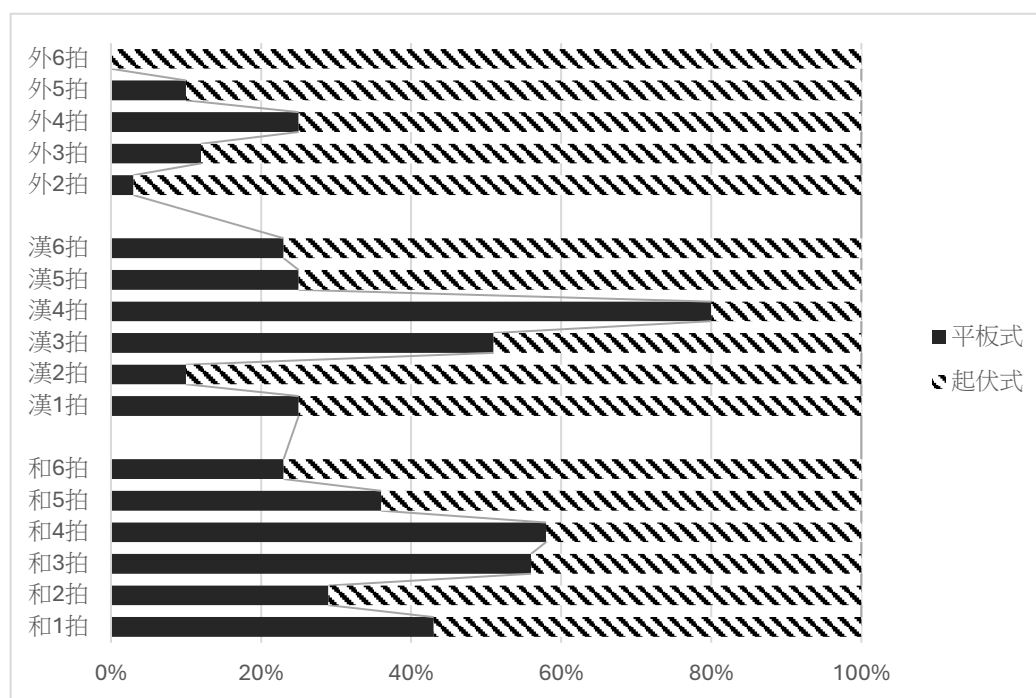


図 1 『NHK98』における平板式と起伏式の割合（最上他 1999）

四つ目は、日本語アクセントの変動性と平板化である。三樹(2014)によれば、日本語アクセントは歴史的に変化し続けており、現代においてもその変動は継続している。「周囲の方言の影響」「若者言葉の普及」「専門用語の一般化」「メディアの影響力拡大」といった社会言語学的要因によって、アクセント型が徐々に変化している。特にアクセントの平板化の進行が注目されている。松崎(2018)は、東京方言における平板化傾向について調査をおこない、特に若年層を中心にこの傾向が顕著であることを述べている。田中(2010)の調査では、首都圏出身の60歳以上の高齢層と高校生で比較した結果、東京中心部から郊外へ、そして年長者から若年者へと急速に平板化が拡大していることが示された。同様に、秋永(1999)も現代日本語における平板化の加速を指摘し、これを音韻変化の自然な流れとして位置づけている。小河原(2021)²によると、放送・芸能やコンピュータ関連の専門語では平板化が先行し、若者や専門家の間で「かっこいい」発音として受容された後、一般化していく傾向がある。これらの研究結果は、日本語アクセントが静的な規範ではなく、変動する動的な現象であることを明確に示しており、平板化が進んでいることを裏付ける。

この平板化の変化は、辞書上でも反映されている。例えば『新明解国語辞典』(初版：1972年)以来、標準的な東京語アクセントを掲載しつつ、若年層の新しい発音を積極的に取り入れる方針を示している。最新第8版(2020年)までに、外来語や和製語で多数の平板化が確認されており、辞書編纂原則でも「若者の新しい型」を採用することで変化に追随すると明言している。『NHK 日本語アクセント辞典』でも近年は若者言葉のアクセント調査が重視され、伝統的な江戸言葉とのズレを踏まえた新版が刊行されるようになってい

² ことば研究館：ことばの疑問「最近、日本語を平たく言うアクセントが気になります。誤りではないでしょうか」

<https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-124/> (2025年8月27日閲覧)

る。『NHK 日本語発音アクセント新辞典 2016』（以下、『NHK16』）の序文では、「ことばは生きており、常に変化している。アクセントの基準も時代とともに変わるものである」と明記されており、辞書編纂者自身がアクセントの変動性を公式に認めている。塩田（2017）は『NHK16』と過去の辞典を比較分析し、特に平板型の割合が増加傾向にあることを具体的なデータで示している。表 1 は、塩田（2017）が提示した語彙例の一部をまとめたものである。これには「平板型の追加」と「平板型の格上げ」の二種類が存在する。前者は、もともと平板型をもたない語彙に平板型が新たに加わったものであり、後者は、平板型が第一アクセントに格上げしたものである。

表 1 日本語アクセント平板型の増加（塩田 2017）

拍数	単語	平板型の追加		単語	平板型の格上げ	
		NHK98	NHK16		NHK98	NHK16
3	手並み	①	①	小百合	①, ①	①
3	小かぶ	①	①, ①	炭火	②, ①	①, ②
3	手まね	①	②, ①	間近	①, ①	①, ①
4	前足	①, ②	②, ①, ①	ちびっ子	②, ①	①, ②
4	秋さば	②	①, ②	朝方	②, ①	①, ②
4	打ち首	②, ③	①, ②	黒髪	②, ①	①, ②

本稿で論じてきた「教育的簡略化」「無標」「アクセント分布」「アクセントの変動性」という四つの要因は、平板型代用法が単なる教育上の便宜的手段にとどまらないことを、理論と現状の双方から総合的に確かめた。むしろ、日本語アクセントにおいて平板型の性質が示す傾向と、実際に観察される変化の方向性が合致している点を踏まえ、きわめて合理的なアプローチとして改めて再評価すべきであろう。

1.3 本研究の目的

本研究は、日本語アクセントを「規則的で予測できるカテゴリー」と「予測困難なカテゴリー」に区分し、それぞれについて妥当な指導方針を客観的な根拠にもとづいて提示することを目的とする。アクセント指導の設計においてこの区分を制度化することは、記憶負担の削減と授業時間の最適配分を可能にするという点で非常に重要であり、その教育的必要性は高い。

第一に、規則的で予測できるカテゴリーについて、既存知見を再編・精緻化し、どの語種・拍数・構造で規則予測が成立するかを体系的に明示する。これにより暗記を要しないカテゴリーを可視化し、学習の順序化と評価基準の一貫性を確保する。アクセントの規則の可視化は、指導と学習の双方において、限られた教育資源下での効率化に直接寄与する。

第二に、予測困難なカテゴリーについて、品詞・拍数・頻度などの指標にもとづき分析する。その上で平板型代用法の妥当性を実証的に検討する。具体的には、辞書の記述から許容されるアクセント型を調査し、平板型の分布を把握する。平板型代用法がどこまで機能するか、またどの条件で適用を控えるべきかを明確化する。これにより、平板型代用法を全面的に容認・否認するのではなく、条件付き適用という実務的に運用可能な基準を提示する。

以上の二点を統合し、本研究は日本語アクセントの体系的学習モデルを構築する。これにより、日本語アクセント指導の理論的基盤が強化され、カリキュラム設計・教材開発・評価ルーブリックに直結する現場で再現可能な教授法が確立されることが期待される。限られた教育資源下でも運用可能な実証的ガイドラインを提供する点で、本研究の教育的有用性と波及効果は非常に大きく、必要性も高い。

2. アクセントの型が予測できるカテゴリー

2.1 動詞および形容詞のアクセント

動詞と形容詞の終止形のアクセント規則は、特殊なものを除いて[平板型]と[-2 型]³の 2 種類しかない（塩田 2016a、池田 2024、『新明解 14』）。[平板型]には[平板型]の、[-2 型]には[-2 型]の活用形のアクセント規則がある。『NHK16』をもとに動詞と形容詞のアクセント規則を表 1 と表 2 にまとめた。なお、本表が目指すのは、動詞および形容詞のアクセント規則を[平板型]と[-2 型]の二型として明示することであるため、活用形は必要最小限の例示にとどめてある。

また、[平板型]と[-2 型]に所属する動詞と形容詞の数は均等ではない。全体として[-2 型]のほうが多い。特に形容詞に関して池田（2024）は、約 30 語が[平板型]で、そのほかが[-2 型]であると述べている。塩田（2016a）は、動詞および形容詞の[平板型]が[-2 型]に移りつつあるという言語変化の現象が以前からあると指摘している。表 2 から読み取れるように、[平板型]の「甘い」「冷たい」「優しい」は[中高型]も許容している。以上の研究は、動詞および形容詞は[-2 型]が優勢であることに加え、形容詞においては[-2 型]が一層顕著化し、[平板型]が着実に減少しているという現状を指摘している。

³ 語末から数えて 2 拍目にアクセント核を置く型を指す。

表 1 動詞のアクセント規則 (『NHK16』)

		拍数	語	終止形	未然形 [ない形]	連用形 [て形]	過去形 [た形]	仮定形 [ば形]
平 板 型	五段式	3	泣く	ナクー	ナカナイー	ナイテー	ナイター	ナケ\バ
	上一段	3	浴びる	アビルー	アビナイー	アビテー	アビター	アビレ\バ
	下一段	3	消える	キエルー	キエナイー	キエテー	キエター	キエレ\バ
	サ行変	2	する	スルー	シナイー	シテー	シター	スレ\バ
中 高 型	五段式	3	泳ぐ	オヨ\グ	オヨガ\ナイ	オヨ\イデ	オヨ\イダ	オヨ\ゲバ
	上一段	3	起きる	オキ\ル	オキ\ナイ	オ\キテ	オ\キタ	オキ\レバ
	五段式	3	晴れる	ハレ\ル	ハレ\ナイ	ハ\レテ	ハ\レタ	ハレ\レバ

表 2：形容詞のアクセント規則 (『NHK16』)

	拍数	語	終止形	連用形 [く形]	連用接続形 [て形]	過去形 [た形]	仮定形 [ば形]
平 板 型	3	赤い	アカイー	アカクー	アカ\クテ	アカ\カッタ	アカ\ケレバ
	3	甘い	アマイー	アマクー	アマ\クテ	アマ\カッタ	アマ\ケレバ
			アマ\イ				
	4	冷たい	ツメタイー	ツメタクー	ツメタ\クテ	ツメタ\カッタ	ツメタ\ケレバ
			ツメタ\イ				
	4	優しい	ヤサシイー	ヤサシクー	ヤサ\シクテ	ヤサ\シカッタ	ヤサ\シケレバ
			ヤサシ\イ		ヤサシ\クテ	ヤサシ\カッタ	ヤサシ\ケレバ
中 高 型	3	白い	シロ\イ	シ\ロク	シ\ロクテ	シ\ロカッタ	シ\ロケレバ
				シロ\ク	シロ\クテ	シロ\カッタ	シロ\ケレバ
	4	短い	ミジカ\イ	ミジ\カク	ミジ\カクテ	ミジ\カカッタ	ミジ\カケレバ
				ミジカ\ク	ミジカ\クテ	ミジカ\カッタ	ミジカ\ケレバ

2.2 複合語のアクセント

複合語のアクセント規則は、主に後部要素の拍数とアクセント型によって決まる。前部要素はアクセント核を失い後部に結合する役目しか持っていない（田中・窪 1999）。複合語のアクセント規則については、田中・窪（1999）、『NHK16』および松崎（2003）が詳しい。複合語のアクセントの主な傾向として『NHK16』は、後部要素の 1 拍目にアクセント核が置かれる[後部一型]が一番多いとし、前部要素の最終拍にアクセント核が置かれる[前部末型]がそれに次ぐと記載している。以下では、上記三つの典拠にもとづき、複合語のアクセント規則を以下の三つに分類できる。

① 後部要素が 1 から 2 拍の場合

原則として前部要素の最終拍にアクセント核が置かれる。ただ、前部要素の最後のモーラが特殊拍の場合、アクセント核は左側に移動する。『NHK16』では[前部末型]と呼んでいる。具体例として、「まえうり\けん（前売り＋券）」「つうわ\りょう（通話＋料）」「うんど\うかい（運動＋会）」などがある。一部は、「まねきね\こ（招き＋猫）」「こうそうビ\ル（高層＋ビル）」のような後部のアクセント核を保持する場合や、「みどりいろ⁻（緑＋色）」「ひだりうで⁻（左＋腕）」のような後部要素が[尾高型]の和語・漢語の場合は複合語全体が[平板型]で発音される場合もある。

② 後部要素が 3 から 4 拍の場合

後部要素のアクセント型によって全体のアクセント型が決まる。「こがたカ\メラ（小型＋カメラ）」のような後部要素が[頭高型]の場合と、「かみひこ\うき（紙＋飛行機）」のような[中高型]の場合⁴は、全体のアクセントは後部要素のアクセント型に準じる。一

⁴ 後部要素が[中高型]でかつアクセント核が[-2 型]にある場合は、その核が消え後部要素の 1 拍目に新たにアクセント核が置かれる。これについて田中・窪

方、「ゆきお\とこ（雪＋男）」のような後部要素が[尾高型]の場合と、「プロや\きゅう（プロ＋野球）」のような[平板型]の場合は、後部要素の1拍目に新たにアクセント核が置かれる。

③ 後部要素が5拍以上の場合

原則として後部要素のアクセント型が適用される。『NHK16』では[後部保存型]と呼んでいる。具体例として、「とうきょうオリンピック\ック（東京＋オリンピック）」「でんしたいおんけい\（電子＋体温計）」などが挙げられる。さらに、田中・窪菌（1999）は、5拍語以上の名詞は[平板型]が少なく、[-3型]の語が一般的なため、結果として[-3型]が強い傾向にあると指摘している。

そのほかにも細かい規則がある。例えば、窪菌（1999）によると、前部要素が3拍以上で後部要素が2拍の外来語をとる複合語のアクセントは二つしかない。①「ネクタ\イピン」「アップル\パイ」「パトロール\カー」のように前部要素の語末音節にアクセント核を持つタイプと、②「ミックスピ\ザ」「シャトルバ\ス」「天然ガ\ス」のように後部要素の語頭にアクセント核を持つタイプしかない。

2.3 外来語のアクセント

① 2拍語の場合

2拍語の外来語においては、「ド\ア」「バ\ス」「ガ\ス」などの例に見られるように、原則として[頭高型]になる。

② 3拍語の場合

同様に3拍語も「ク\ラス」「ケ\ーキ」「ト\マト」のように基本的には[頭高型]となる。ただ、『NHK16』では3拍語で特殊拍

菌（1999）は、後部要素のアクセント核が比較的左側にあればそれを保持し、右側のほうにあれば（あるいは[平板型]であれば）、アクセント核を後部1拍目に置くと指摘している。

が最終拍にある場合には「ジャパ\ン」「ブル\ー」「マシ\ン」のように[中高型]になるものが多いと記述している。

③ 4 拍語の場合

4 拍語は[頭高型]が過半数に近いが、次いで[-3 型]、次に[平板型]がこれに続く（『NHK16』『新明解 14』）。『NHK16』では、特殊拍との関連である程度傾向が指摘できると述べている。①「エ\ックス」「ド\ーナツ」「エ\ンジェル」のような形で、2 拍目が特殊拍の場合は[頭高型]になる。②「ドリ\ップ」「オリ\ーブ」「オレ\ンジ」のような形で、3 拍目が特殊拍の場合は[中高型]になる。③「カ\ロリー」「オ\ニオン」のような形で、最終拍が特殊拍の場合は[頭高型]になる。④「アドリブ\」「アルバム\」のような形で、特殊拍を含まない場合は[平板型]になる。

④ 5 拍以上の場合

5 拍以上の語になると「ストラ\イク」「インドネ\シア」「オーストラ\リア」のように、原則として[-3 型]が優勢となる（窪菌 1999、『NHK16』、『新明解 14』）。ただし、「エコ\ノミー」「カテ\ゴリー」のような形で最終拍が長音の場合はアクセント核が左側に移動し[-4 型]になる。

これらの規則を別の視点から捉えると、一部の例外はあるものの[-3 型]規則が外来語アクセントの基本原則として機能していることが見受けられる。2 拍語に[-3 型]規則を適用する場合、そもそも 3 拍目が存在しないため、自然と左側に移動しアクセント核が置かれることになる。特殊拍が語末から数えて 3 拍目に位置する場合、「サ\ッカー」「キャ\ンパス」「ス\ーパー」「エレベ\ーター」などの例のように、アクセント核は特殊拍の左側に移動する。このように、外来語のアクセントは語の長さや拍構造に応じて柔軟に働きつつも、一定の規則性を保っている点がわかる。その点に関連し

て、窪 蘭（1999:203）は外来語アクセント規則について、語末から 3 番目の拍を含む音節にアクセント核を付与するとまとめている。上記に述べた特殊拍の拍に付与されたアクセント核が右側ではなく左側に移動することについては音節という概念を取り入れることによって説明可能となる。

ただし、この原則には例外も存在する。「ボタン^ː」「アイロン^ː」「アルコール^ː」のように、古くから日本語に定着した語や日常的に頻繁に使用される 3 から 5 拍語の外来語は平板化する傾向が見られる。また「メール^ː」「サークル^ː」「マネージャー^ː」など、専門家や若年層によって多用される語彙にも平板化の現象が観察される。さらに「サ\イクリング」「アセ\スメント」などの比較的新しく導入された語においては、原語のアクセントパターンが影響を及ぼす傾向も認められる。

3. アクセントの型が予測できないカテゴリー

3.1 調査の目的

本調査の目的は、アクセントの型が予測できない名詞における平板型の許容の実態を計量的に把握する。さらに、学習初期の平板型代用法の適用範囲を教育的観点から明確化することである。最上他（1999）は名詞を和語・漢語・外来語の三つの語種に区分してアクセント分布を示した。ただ、外来語はアクセントが比較的規則的に予測できる。また学習者にとって和語と漢語の識別は必ずしも容易ではない。そこで本研究は語種ではなく、学習者が聴覚的に同定しやすい音韻的手掛かりにもとづき、拍数（2 から 5 拍語）と特殊拍（長音・促音・撥音）の有無で名詞を再編成して分析する。本調査の独自性としては、辞典内で示された第一から第三アクセントに平板型が示される場合はすべて「許容」として扱い、拍数×特殊拍別に許容比率を算出する点にある。さらに平板型代用法が「いつ・どこまで」安全か、また「どの条件で」回避すべきかを指標化する。

以上により、語種分類に依存しない日本語教育の現場に応用できる指導設計を支える基盤データを提供する。

3.2 調査の概要

3.2.1 調査の語彙

本研究では、国立国語研究所が作成した『日本語教育のための基本語彙調査』にもとづく語彙を調査対象とする。この基本語彙は、外国人学習者が日本語を学ぶ際に必要不可欠な語彙を網羅的に選定したものであり、日本語教育の現場で広く活用されている信頼性の高い資料である。

この基本語彙は 6,896 語あり、本研究の目的に即して以下の通りに精査をおこなう。まず、使用した『新明解 14』に掲載されている語彙と照らし合わせ 6,116 語を抽出した。次に、1 拍と 6 拍以上の語彙は数が非常に少なかったため、今回の調査では 2 拍から 5 拍までの語彙のみを対象とし計 5,876 語を抽出した。そして、アクセントに規則性があり予測できるものと機能語を取り除いた。感動詞(21 語)、形容詞(341 語)、助詞(20 語)、接続助詞(24 語)、代名詞(37 語)、動詞(978 語)、副詞(276 語)、連体詞(20 語)を取り除いた名詞のみの語彙は 4,159 語となった。さらに、その中から外来語(254 語)を排除した計 3,905 語を最終的な調査の語彙とした。

3.2.2 調査の方法

本調査では、対象となる語彙のアクセントを『新明解 14』にもとづき記録した。同辞典は、現行のアクセント辞典の中で現代の東京生まれ・育ちの人の発音を徹底調査し、「東京式アクセント」を忠実かつ詳細に反映して編集されている辞典であるため、調査の基準として採用した。

調査にあたっては、まずアクセント型について、辞典に記載されているアクセント型を全て記録した。特に、第一アクセントのほか

に、第二・第三アクセントとして平板型が示されている場合も、本研究では平板型は許容される語として扱った。これは、辞典の掲載基準にある「第一アクセント以外にも許容できるアクセントがある場合には、第二あるいは第三アクセントとして示す」という方針を採用していることにもとづく。この方法は、アクセントのゆれや平板化を包括的に捉えることが可能となる。次に、語彙に含まれる特殊拍（長音・撥音・促音）の有無とその種類を記録した。さらに、オンライン日本語解析ツール「Web 茶まめ」を利用し、各語彙の語種と品詞を特定した。

本研究における分析の大きな特徴は、特殊拍の有無にもとづいて分類をおこなう点にある。従来の研究では語種による分類が主流であったが、日本語学習者にとっては語種の判別よりも音韻的な特徴である特殊拍の有無や特殊拍の種類の方が識別しやすい。アクセントの体系的な習得支援という本研究の目的に鑑み、学習者の視点から、より客観的な指標である特殊拍にもとづいて分析を進める。

3.2.3 分析の方法

まず、2拍から5拍までの語を抽出し、拍数ごとの総語彙数を算出した。次に、これらの語彙の中から平板型アクセントを持つ語を特定し、拍数ごとにその総数と全体に占める比率を算出した。その際、アクセントのゆれを考慮し、第一アクセントとして記載されているものだけでなく、第二、第三アクセントとして平板型が許容されている語も全て計上した。さらに、特殊拍がアクセントに与える影響も分析するため、長音、促音、撥音を含む語彙群のみを対象として抽出し、上記と同様の手順で平板型の語彙数およびその比率を算出した。

3.3 結果と考察

3.3.1 名詞全体の語彙の場合

総語彙 3,905 語のうち、平板型が第一から第三アクセントとして許容される語は 2,271 語（58%）であった。すなわち、約半数強で平板型が許容される結果であり、アクセント型が予測できない名詞に限っても平板型は例外的ではなく一般的に観察される選択肢であることが確認された。

拍数別の比率は、2 拍語が 210/748（28%）、3 拍語が 740/1,324（56%）、4 拍語が 1,259/1,985（75%）、5 拍語が 62/148（42%）である。とりわけ 3 拍語と 4 拍語で平板型が優勢であるのに対し、2 拍語では低率、5 拍語では中位という対照的な分布が観察された（いずれも四捨五入）。

これらの数値は、第一アクセントのみならず第二・第三アクセントにおける平板型の許容も集計している点に留意が必要である。なお、調査結果は表 3 にまとめてある。表 3 は 2 拍から 5 拍までの各拍数について示している。上から順に総語彙、第一アクセントが平板型の語彙数、第二アクセントが平板型の語彙数、第三アクセントが平板型の語彙数、第一から第三までを合算した平板型が許容される語彙数、そして平板型が総語彙に占める割合を示している。

表 3 全体の語彙の結果

	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	合計
総語彙	748	1324	1985	148	3905
第一ア平板型	198	711	1221	57	2187
第二ア平板型	12	28	33	5	78
第三ア平板型	0	1	5	0	6
許容平板型	210	740	1259	62	2271
平板型の割合	28%	56%	75%	42%	58%

本研究において、平板型の割合が拍数に応じて異なることが確認された。この結果は、先行研究の知見を支持するものである。また、1.2 節で整理した最上他（1999）のアクセント分布における平板型比率の高さとも類似している。教育的観点から解釈すると、これらの事実にもとづき、学習初期の平板型代用法を条件付きで運用することが妥当である。具体的には、3 拍語と 4 拍語では原則使用を許容する。2 拍語では平板型の比率が低いため平板型代用法は慎重になるべきである。5 拍語では個別判断で許容する。ただ、この代用法は初級段階の暫定措置と位置づけ、中級以降では高頻度語から順次当該単語のアクセントを覚え、最終的な精度向上をする必要がある。

3.3.2 長音を含む語彙のみの場合

長音を含む語彙では、総語彙数 1,333 語のうち、平板型が許容される語は 910 語（68%）であった。すなわち、約 3 分の 2 が平板型を許容する結果であり、名詞全体（58%）と比較して長音を含む語では平板型の許容が高くなっていることが確認された。

表 4 長音を含む語彙のみの結果

	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	合計
総語彙	77	356	834	66	1333
第一ア平板型	11	203	649	20	883
第二ア平板型	1	8	16	2	27
第三ア平板型	0	0	0	0	0
許容平板型	12	211	665	22	910
平板型の割合	16%	59%	80%	33%	68%

拍数別の内訳は、2 拍語が 12/77（16%）、3 拍語が 211/356（59%）、4 拍語が 665/834（80%）、5 拍語が 22/66（33%）であった。4 拍語では平板型が優勢であり、3 拍語でも約半数強を占める。一方、2 拍

語では 16%にとどまり、5 拍語は 33%と中位であった。なお、長音を含む母集団の拍数構成 4 拍語が 62.6% (834/1,333) と支配的で、これが全体の許容率 (68%) を押し上げる要因の一つである。

また、長音を含む語彙の平板型の比率も名詞全体の比率と比べて上昇している部分がある。3 拍語では 56%→59% (+3%)、4 拍語では 75%→80% (+5%) と、長音の有無に起因する平板許容の上積みが一定程度示唆される。対照的に、2 拍語では 28%→16% (-12%)、5 拍語では 42%→33% (-9%) であり、長音の存在が必ずしも平板型の許容を強めないことが分かる。つまり、長音を含む 3 拍語と 4 拍語では平板型代用法が相対的に安全域に入りやすい一方、2 拍語と 5 拍語ではより慎重な使用が求められる。

3.3.3 促音を含む語彙のみの場合

促音を含む語彙では、総数 160 語のうち平板型が許容される語は 120 語 (75%) であった。すなわち、7 割以上が平板型を許容する結果であり、名詞全体 (58%) と比較しても、促音を含む語では平板型の許容が非常に高いことが確認された。

表 5 促音を含む語彙のみの結果

	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	合計
総語彙	0	49	105	6	160
第一ア平板型	0	32	86	0	118
第二ア平板型	0	1	1	0	2
第三ア平板型	0	0	0	0	0
許容平板型	0	33	87	0	120
平板型の割合	0%	67%	83%	0%	75%

拍数別にみると、3 拍語が 33/49 (67%)、4 拍語が 87/105 (83%) と高い比率を示し、平板型が優勢であることがわかる。一方、2 拍

語は該当語なし、5 拍語は 0/6 (0%) と低い比率であり、5 拍語はサンプル数が小さいことを踏まえても平板型が劣勢的であることが示唆される。

促音を含む語彙の平板型比率を名詞全体の比率と比較すると、3 拍語では 56%→67% (+11%)、4 拍語では 63%→83% (+20%) となり、促音の存在に起因する平板型の許容の上積みが確認された。対照的に、2 拍語では 28%→0% (-28%)、5 拍語では 42%→0% (-42%) といずれも 0%であり、2 拍語と 5 拍語において、促音を含む語彙では平板型の使用を抑える必要があることが明らかになった。したがって日本語教育の運用としては、促音を含む 3 拍語と 4 拍語では、平板型の比率が相対的に高いため平板型代用法は原則使用を許容する。一方、2 拍語および 5 拍語では平板型代用法は用いるべきではないと結論づけられる。

3.3.4 撥音を含む語彙のみの場合

撥音を含む語彙では、総語彙数 1,084 語のうち平板型が許容される語は 666 語 (61%) であった。すなわち、約 3 分の 2 が平板型を許容する結果であり、全体の語彙比率 (58%) と比較しても撥音を含む語では平板型の許容が高いことが確認された。

表 6 撥音を含む語彙のみの結果

	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	合計
総語彙	73	271	681	59	1084
第一ア平板型	16	125	494	14	649
第二ア平板型	0	3	10	3	16
第三ア平板型	0	0	1	0	1
許容平板型	16	128	505	17	666
平板型の割合	22%	47%	74%	29%	61%

拍数別にみると、2 拍語が 16/73 (22%)、3 拍語が 128/271 (47%)、4 拍語が 505/681 (74%)、5 拍語が 17/59 (29%) である。4 拍語のみが高い比率を出していることがわかった。名詞全体の比率との比較では、2 拍語では 28%→22%(-6%)、3 拍語では 56%→47%(-9%)、4 拍語では 63%→74% (+11%)、5 拍語では 42%→29% (-13%) となり、撥音の存在が一律に平板型の許容を高めるわけではない。むしろ 4 拍語のみの上昇が見られ、2 拍語と 3 拍語と 5 拍語では平板型の許容の低下が観察された。日本語教育の観点から解釈すると、撥音を含む語彙においては平板型代用法は制限付きで使うことが望ましい。具体的には、4 拍語では平板型代用法は原則許容してもいいが、2 拍語と 5 拍語は代用法の使用に慎重になるべきである。3 拍語は個別判断で許容する。

3.4 小結

本節では、特殊拍（長音・促音・撥音）を含む名詞の平板型のアクセント分布を見てきた。特殊拍を含む語彙は、名詞全体よりも平板型の比率が総じて高いことが確認された。とりわけ 4 拍においては、長音 80%、促音 83%、撥音 74%と、7 割から 8 割が平板型であり、名詞全体 75%と同等あるいは高い結果が得られた。特殊拍の介在が 4 拍語において平板型の許容を押し上げる傾向が明瞭であった。一方、3 拍語は長音 59%、促音 67%で名詞全体 56%よりも上昇が観察されたのに対し、撥音は 47%と下回るなど、特殊拍の種類による差が示された。さらに 2 拍語では長音 16%・撥音 22%（促音は該当語なし）と低率であり、名詞全体（28%）を下回る。5 拍語でも長音 33%・撥音 29%・促音 0%であり（名詞全体：42%）と低調で、平板型の許容が低い領域であることが観察された。

以上より、特殊拍を含む 4 拍語では平板型代用法を学習初期の暫定方略として比較的安全に運用できるのに対し、2 拍語および 5 拍語では平板型の許容比率が低く、代用法の使用は慎重であるべき結

果となった。3 拍語については、長音・促音を含む場合には条件付き許容の余地がある。一方で、撥音の許容率は全体を下回るため、個別の確認が望ましい。

4. おわりに

本研究は、近年のアクセント研究における「規範性から変動性へ」というパラダイムシフトを日本語教育の実践に直結する理論的・実証的枠組みを提示するものである。上野（2003）が示すように、「標準語」とされる東京方言でさえ地域差・世代差が観察される以上、単一の規範を絶対視することは方法論的に脆弱である。また田中（2008）は、母語話者自身にアクセントのゆれを伴う語彙が多い事実を実証し、学習者の産出を一義的に誤用と断じる妥当性を問い直した。この認識にもとづき、本稿は日本語の語彙アクセントを「規則的でアクセントが予測可能なカテゴリー」と「予測できないカテゴリー」に区分し再定式化した。前者については、動詞、形容詞、複合語、外来語といった学習者が識別しやすいものを視野に入れて、そのアクセントの規則を精緻化し、体系的なアクセント教育に応用可能な記述を与えた。後者については、学習初期の足場がけとして平板型代用法を条件付きで運用する教育指針を示し、可理解性と流暢性の確保を優先する段階的指導の枠組みに位置づけた。

本研究の独自性は、その条件設定を従来の語種の分類に依拠せず、初級学習者が知覚・判断しやすい「拍数×特殊拍」という客観的な音韻的手がかりにもとづいておこなった点にある。計量的分析の結果、3 拍語と 4 拍語では平板型への一時的代用が許容されやすい一方、2 拍語と 5 拍語では許容度が低く、代用法の使用は慎重になるべきである。また特殊拍の種類によっても許容度が異なることが明らかになった。これにより、平板型代用法を画一的な代替手段とせず、辞書情報の参照を前提に、限定的・条件的に用いるべきだという本稿の主張を裏付けられた。なお、アクセントが予測可能なカテゴリ

一に対するアクセント規則の精緻化は、日本語アクセント教育の設計上の指標として活用できる一方、アクセントが予測困難なカテゴリにおいては、許容できる範囲内であれば平板型代用法を用いるなど、二層設計を採ることで、指導上の一貫性と運用上の透明性を両立させた。

本研究が日本語教育に貢献できる点は三つに要約される。第一に、アクセントの規則学習と許容的代用を体系的に統合し、指導の優先順位を明確化する理論的枠組みを提示したこと。第二に、学習者の記憶負担や授業資源の制約を考慮し、発話の停滞を回避しながら可理解性を確保するための具体的な運用基準を実証的に示したこと。第三に、評価において可理解性と精度を分離する段階的設計を提案し、初級段階の自信形成と中級以降の精緻化を接続する現実的な指導モデルを構築したことである。

今後の課題として、辞書の記述にもとづく本研究の妥当性を、実際の母語話者の知覚評価や学習者の産出実験を通じて多角的に検証する必要がある。本研究が主張する日本語アクセントの体系的学習に寄与する規則と許容が、日本語アクセント教育の基盤を強化し、学習者への実質的な支援となることを確信している。

参考文献

- 相澤正夫（1996）「語の長さとアクセント変化—『東京語アクセント資料』の分析—」『国立国語研究所研究報告集』17, pp.181-237
- 秋永一枝（1999）『東京弁アクセントの変容』笠間書院
- 鮎澤孝子（2003）「外国人学習者の日本語アクセント・イントネーション習得」『音声研究』7(2), pp.47-58
- 池田悠子（2024）『日本語教師をめざす人のためのスモールステップで学ぶ音声』スリーエーネットワーク

- 上野善道（2003）「アクセントの体系と仕組」上野善道編『朝倉日本語講座(3)音声・音韻』 pp.61-84, 朝倉書店
- 窪菌晴夫（1999）『日本語の音声』岩波書店
- 窪菌晴夫（2006）『アクセントの法則』岩波書店
- 窪菌晴夫（2011）『新語はこうして作られる』岩波書店
- 郡史郎（2019）「アクセントとイントネーションの逸脱に対して感じる違和感について」『音声言語の研究』 13, pp.17-28
- 佐藤友則（1995）「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』 5, pp.139-154
- 塩田雄大（2016a）「NHK アクセント辞典“新辞典”への大改訂 2：動詞・形容詞のアクセントをめぐる現状—進む—型化—」『放送研究と調査』 8 月号, pp.82-96
- 塩田雄大（2016b）「NHK アクセント辞典“新辞典”への大改訂 4：外来語のアクセントの現況—在来語化する外来語—」『放送研究と調査』 10 月号, pp.84-102
- 塩田雄大（2016c）「NHK アクセント辞典“新辞典”への大改訂 6：漢語のアクセントの現況—変化の「背景」を探る—」『放送研究と調査』 12 月号, pp.64-85
- 塩田雄大（2017）「NHK アクセント辞典“新辞典”への大改訂 9：和語のアクセントの現況—キ\ズナは消えてもキズナ—は強い—」『放送研究と調査』 3 月号, pp.72-87
- 高橋恵利子（2013）「韓国人学習者の日本語アクセントの知覚と生成」2013 CAJLE Annual Conference Proceedings, pp.280-289
- 高橋恵利子（2014）「英語母語話者における日本語単語アクセントの習得—知識と生成の関係から—」『広島大学日本語教育研究』 24, pp.1-8
- 高橋恵利（2018）「韓国人日本語学習者のアクセント習得要件について—上級学習者を対象に—」『日本語教育』 169, pp.16-30

- 田中浩史（2017）「日本語発音における近年のアクセント傾向の分析と考察—『NHK 日本語発音アクセント新辞典』の発行に寄せて—」『コミュニケーション文化』pp.49-72, 跡見学園女子大学
- 田中真一（2008）『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』くろしお出版
- 田中真一・窪菌晴夫（1999）『日本語の発音教室 理論と練習』くろしお出版
- 田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院
- 崔壯源（2003）「日本語らしさの許容度の実態調査—アクセント核のズレが影響する日本語らしさ—」『第 17 回日本音声学会全国大会予稿集』pp.213-218
- 戸田貴子（2011）「音声教育と日本語能力」『早稲田日本語教育学』9, pp.59-65
- 松崎寛（2003）「アクセント教育の体系的シラバスとアクセントの『ゆれ』」『広島大学日本語教育研究』13, pp.23-30
- 松崎寛・河野俊之（2005）「アクセントの体系的教育を目的とした音声評価研究」『日本語教育』125, pp.57-66
- 松崎寛（2018）『日本語教育よくわかる音声』アルク
- 三樹陽介（2014）『首都圏方言アクセントの基礎的研究』おうふう
- 最上勝也・坂本充・塩田雄大・大西勝也（1999）「『日本語発音アクセント辞典』—改訂の系譜と音韻構造の考察—」『NHK 放送文化調査研究年報』44, pp.97-157
- 李墨彤（2017）「日本語漢語の優勢なアクセント型の分布—外来語と比較して—」『音韻研究』20, pp.11-20
- 李墨彤（2019）『日本語名詞のアクセント型の生成と自然度評価』大阪大学博士論文
- 梁辰（2015）「アクセントの誤用パターンが自然度評価に与える影響の比較」『第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』pp.122-127

Selinker, L. (1972) Interlanguage. *Product Information International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10, 209-241.

辞典類

秋永一枝編（2001）『新明解日本語アクセント辞典第一版』三省堂

秋永一枝編（2014）『新明解日本語アクセント辞典第二版』三省堂

NHK 編（1985）『日本語発音アクセント辞典改訂新版第四版』日本放送出版協会

NHK 編（1998）『NHK 日本語発音アクセント辞典新版第五版』日本放送出版協会

NHK 編（2016）『NHK 日本語発音アクセント新辞典第六版』日本放送出版協会